

Title	細川幽斎家集の研究その二：衆妙集系統諸本について
Sub Title	Hosokawa Yusai Kashu : On the various manuscripts of Shumyoshu
Author	土田, 将雄(Tsuchida, Masao)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1969
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.27, (1969. 3) ,p.110- 127
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	国語国文学・中国語中国文学特集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00270001-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

細川幽齋家集の研究 その二

― 衆妙集系統諸本について ―

土 田 将 雄

さきに「細川幽齋家集の研究 その一」と題して、幽齋家集の諸伝本の分類と解説を上智大学国文学論集の創刊号に発表した。ここでは前稿にひきつづいて、衆妙集系統に分類した諸本について若干の比較考察を試みたものである。玄旨集系統に属する諸本の研究は、稿をあらためて発表することにしたい。

なお便宜を考えて、衆妙集系統の分類表を次に再録しておく。

衆妙集系統

第一類

イ 衆 妙 集

東京大学国文学研究室

ロ 衆 妙 集

愛知教育大学図書館（九一一・一五八 H二S）

ハ 細川幽齋詠草

大阪市立大学図書館（九一一・一四九 HOS）

ニ 衆 妙 集

東京教育大学図書館（ル・二二六・三三）

ホ 衆 妙 集

高松宮家(三〇六)

第二類

イ 衆 妙 集

熊本大学松本教授研究室

ロ 衆 妙 集

佐賀大学図書館(〇九五四・一五)

ハ 衆 妙 集

京都大学図書館(貴四・二三・シ・一)

ニ 衆 妙 集

久保田淳氏藏

ホ 衆 妙 集

宮内庁書陵部(五〇一・六八五)

ヘ 衆 妙 集

ノートルダム清心女子大学

ト 衆 妙 集

永青文庫(巳二六―二十)

チ 藩譜便覧附録衆妙集

永青文庫(四・三・一ノ二)

リ 細川幽斎玄旨翁家集

井上宗雄氏藏

ヌ 衆 妙 集

彰考館文庫(巳五・〇六九三六)

ル 玄旨法印家集

お茶の水図書館

ヲ 衆 妙 集

永青文庫(巳二六―一九)

ワ 藩譜便覧衆妙集

永青文庫(四・三・一ノ二)

第三類

イ 衆 妙 集

国立国会図書館(九二一・一四九 H七二七S)

ロ 詠百首和歌

慶応義塾大学図書館(八八・二〇六)

ハ 衆 妙 集

大東急記念文庫(四二・二六・三〇六三)

第四類

イ 衆 妙 集

お茶の水図書館

ロ 細川幽斎家集

内閣文庫他

ハ 衆 妙 集

京都大学国文学研究室(Eq・一六a)

ニ 衆 妙 集

内閣文庫(二〇一・六一七)

ホ 細川幽斎家集

九州大学図書館(萩・ホ・三七)

ヘ 衆 妙 集

志香須賀文庫

ト 幽斎家集

東京教育大学図書館(ル・二一六・二五)

チ 衆 妙 集

刈谷市立図書館(三・二一六五)

リ 衆 妙 集

東北大学図書館(狩四・一〇六九五)

ヌ 玄旨詠百首和歌
法印

静嘉堂文庫(五二一・二三・二二四二一)

ル 〔衆 妙 集〕

家蔵

衆妙集系統に属する諸本については、以上のように四類にわかつことにした。分類にあたって、特に配慮を用いたのは、第二類と第三類とに分類した諸本についてと、第一類諸本と第二類諸本との関係についてとであった。以下次の項目にわけて考察してゆくことにする。

一 第二類諸本の異同について

二 松本本と他類諸本との比較について

東大本との比較

国会図書館本との比較

一

衆妙集系統の諸本を分類するにあたって、第一類および第四類に属せしめた諸本については、それぞれ比較的明瞭な近似性があつたので、まず無理のない分類を行なうことができたのであるが、第二類と第三類については、今に至るも若干の危惧がないとはいえない。分類の際に基準として着目したのは、主として春部における次の三首の歌の配列箇所であったが、それも第二類の一三本のうち四本は、同類中の他の諸本と異なっているのである。

三月五日、也足軒興行餞別会当座に、花を

291 そことしもしらぬ野山の桜より花こそ花のしほりなりけれ

292 たつね入心とはゝいかゝせんまたみぬやまの花もありやと

293 もろくちる老のなみたにくらふれは猶長閑なる花の朝つゆ

これら三首の歌は、松本本を始めとして九本には、春部の最後に記されているが、書陵部本（五〇一・六八五）では

愚亭興行の会に、花初開

209 かつさける花をし思ふ心よりきのふはしらぬやまかせそ吹

210 心ある人にまたれて咲はなの我をはよそにみむもはつかし

の次に、永青文庫蔵の二本（巳二六―一九、四・三・一ノ一）では、第四類と同じく

三月十七日、宇治にまかりて旅ねし侍ける暁月に郭公の啼を聞て

286 里の名を月にそかこつ郭公はるのよふかき空に啼なり

の次に記されている。彰考館文庫本（巳五・〇六九三六）では、春部の最後に載せられているが、二九二・二九一・二九三の順序とな
っているのである。

二九一・二九二・二九三の歌の配列箇所を主として考えて第二類の分類をころみながらも、これら四本については例外を認めるこ
とにし、それよりは全体的な歌の配列をむしろ考慮して、第二類に組入れたわけである。それ故衆妙集系統第二類においては、多少な
りとも寄合世帯的傾向があるといわなければならない。これは分類を試みる際の難題であったし、分類をした結果においては難点とな
ったことになる。しかし他方第二類中の善本である松本本を祖本として、伝写の際に多少の変化が加えられたとも考えられ、幽齋家集
の伝写上の特質を、この第二類中の諸本に見出だすことができるともいえそうである。以下第二類に属する一三本について二九一・二
九二・二九三の歌の配列箇所の異同以外にみられる相違点をいくつか記しておくことにする。

2 松本本における次の二首の歌は題と歌の内容とがそぐわず、問題である。

雪中聞鶯

164 朝またき霧吹はらふ谷風に先うち出るうくひすのことゑ

谷鶯

165 鶯の梅の花かけささぎても雪のふゝきにぬれて啼也

もっとも一六四の歌と一六五の歌の題とは見せけちになっており、雪中聞鶯の題は一六五のものであるようにはなっている。また松
本本を忠実に模写したとみられる佐賀大学本は、配列順序についても見せけちについても松本本と同様になっている。しかし第二類中
の他の本はすべて一六三・一六五・一六四・一六六の順になっており、この順序のほうが正しいというべきである。一六四の歌は詠百
首和歌における三首目の歌と同じであり、衆妙集系統第一類の如く省いてしまってもよいわけであるが、第二類では省かずに、そのま
ま記してある。松本本を底本とした諸本では、この二首については訂正の上書写したものであろう。

3 松本本において

たきのうへの花

238 瀧波のおつとはみえておとせぬやはなにまされるみかさなるらむ

の歌は、二三九の歌の題の下に小書きされている。そのためか、松本本に忠実な佐賀大学本を始めとして、京都大学本、佐賀大学本、久保田本、書陵部本、井上本、彰考館文庫本では二三八の歌は記されていない。他の第二類の諸本では小書きでなく、二三七の歌の次に記載されている。

4 第二類における諸本の中で、三八四・三八五の歌の配列箇所にも相異がみられる。三八三の歌も同じ題詞のもとにある歌なので、まとめてこれらの歌を列挙してみると、次のとおりである。

播州御陣の時所々見物の次に、明石のうらにて夜の更るまで月をみて

383 明石かたかたふく月も行舟もあかぬなかに嶋かくれつゝ

384 春部ニ可入
うらみしな花の心も待とたにしらは日数のうつり行とも

385 同
淡雪の消にし跡は七種のかけのゝ露に袖やぬれけん

三八四・三八五の歌の肩に「春部ニ可入」とあることによって、書陵部本では省いたままにし、ノートルダム清心女子大学本、永青文庫本（巳二六―二十）では春部に編入し、永青文庫本（四・三・一ノ二）では三八四のみを春部に入れて、三八五は省いた。いずれも三八四・三八五の歌について、その配列箇所にも考慮を払っている点では、衆妙集系統第一類の愛知教育大学本の場合と同じである。

これらの相異点のほかに、永青文庫本（四・三・一ノ二）、彰考館文庫本、永青文庫本（四・三・一ノ一）および井上本では、五一一の歌が欠けているが、これは重複歌として省いたものと考えられるのである。

第二類に属する諸本には、以上のような相異点があるが、その他は大凡共通した歌の配列順序をなしている。総じていえることは、書写の過程において、筆者の考えにより多少の手直しを施した点を認めうるのであるが、第二類として分類することは妥当であると考えられる。

次に衆妙集系統に属する四類を比較する試みとして、第二類の代表としての松本本と、他の第一、第三、第四類の代表としての東大本、国会図書館本、お茶の水図書館本とを比べてみることにする。

松本本と東大本

既論文において両者の相異点六および歌の増減について記しておいたが、これらについてより精細に考察してみたい。

1 まず一七五・一七六・一七七・一七八の歌の配列順序についてであるが、二本の相異を題によって示してみると次の如くなる。

		松本本			東大本
175	余寒霜		175	余寒霜	
176	露暖梅開		177	若木梅	
177	若木梅		176	露暖梅開	
178	夜梅		178	夜梅	

梅花の題でよまれた最初の歌がいれかわっていることになるが、歌の内容を考えると松本本のほうが季節の推移をおって無理がなく、自然であるというべきである。

露暖梅開

176 梅かえもあふひの草のゆかりとや日影にむかふ露よりそ咲

若木梅

177 いかにして昔のかにはほふらんうへし若木のむめの初はな

一七五の霜をよんだ歌から、「露よりそ咲」と一七六の歌によって情景が移り、つづいて一七七の歌の「うへし若木のむめの初はな」と咲いた梅花にじっと目が注がれ、技巧の上からも、体言止にして既に咲いている梅花を印象づけているのである。

2 梅花の題でつづいている一八一以下にも相異がある。前項にしたがって題のみを示すと、

松本本 東大本

180 梅花久芳 180 梅花久芳

181 同 181 同

182 梅花久薫 186 多年翫梅

183 軒梅 187 同し心を

184 梅有佳色 182 梅花久薫

185 同 183 軒梅

186 多年翫梅 184 梅有佳色

187 おなし心を

188 同 185 同

となつてゐるが、梅花についての題詠歌は、これで一まず終わり、つづいての梅花の歌三首は贈答歌である。二本の相異点は一八六と一八七の二首の歌の配列箇所についてと一八八の歌の有無である。

同廿年正月十二日、龍野侍従にて有し会に、多年翫梅

186 散ものゝさりとてたえぬなめ哉春いくかへりさくやこのはな

同正月十三日、月次会始に、おなし心を

187

うへをきし一樹ことにと身を分て春いくかへりなめしつらん

188

たのみきぬ松も昔のとはかりに春さく梅を知人にして

今こころみにこれら三首の歌について、玄旨集系統の第三、第四、第五類諸本における代表的なものを調べてみると、第三類の幽斎歌集では、一八六・一八九・一九〇・一八七・一八八となっており、第四類の詠百首和歌（高松宮家蔵）では、一八六・一八七・一八八とつづいて記されている。また第五類の細川玄旨法印歌集（京都大学研究室蔵）では、一八〇・一八一・一八六・一八七・一八二となっており、配列順序も一八八の類の脱落も東大本と同じである。したがって松本本では京大本、東大本に脱落している一八八の歌を再録するとともに、一八六・一八七・一八八を一八五の後に移動させたことになる。かくすることによって梅花久芳と梅花久薫とをならべ、多年翫梅の歌を後にまわして、多分に追憶的な内容をもつこれら三首の歌を題詠歌の最後におくことしたのである。このようにして前項の移動とともに梅花の題詠歌一三首は首尾を整えることになる。ちなみに幽斎歌集に記された一八七・一八八の歌の題は

正月十二日、会始に、年内立春を

とあり、第四類の詠百首和歌では

正月十三日、月次会始に

とあるのみである。歌の内容を考えると、一八六の歌の題多年翫梅をうけて

同正月十三日、月次会始に、おなし心を

としてある松本本、東大本、京大本は、若干恣意にすぎたきらいがあるといえよう。いずれにしても一八七・一八八の歌を題詠歌の最後におくことは至当というべきである。

3 次に春月の題詠歌の相異を記しておこう。

194	松本本	東大本
195	春月	194 春月
196	同	195 同
197	春暁月	196 春暁月
198	月流春夜短	198 遠山春月
199	遠山春月	199 同
200	同	197 月流春夜短
	名所春月	200 名所春月

東大本において一九七の歌は一九八・一九九の歌の次におかれている。一九八・一九九の題詞には二月十六日、一九七の題詞には二月二十五日と日付があり、配列宜しきを得ているようにみえる。また松本本には二月十六日のかわりに同十六日とあるので、日付は前後いれかわっているが、同じ年の作歌とみなされている。

玄旨集系統の諸本について調べてみると、玄旨様御哥では天正十七年の項に一九九・一九八の歌、文禄二年の項に一九七の歌がのせられており、それぞれの題詞の日付は、十六日夜および二月二十五日となっている。幽斎歌集では、一九四・一九五・一九六・一九九・一九八・二〇〇・一九七の順に配列され、日付については、一九九・一九八は二月十六日、一九七は二月二十五日である。詠百首和歌では、一九四・一九五・一九九・一九八・二〇〇・一九七の順で、一九六が脱落しているが、日付が一九九・一九八にはなく、一九七には二月二十五日となっている。細川玄旨法印歌集では東大本と同じ順序であるが、一九八・一九九の題詞に日付がなく、一九七に二月二十五日としてある点では詠百首和歌と同じである。

このように玄旨集系統諸本から衆妙集系統諸本へと、歌の配列順序の推移がみられるのであるが、松本本に至って遂に同年同月のものでして記載されることになった。これは誤りであるとしても、あえて二月二十五日の歌を二月十六日の歌の前に配列したことは、編

者にそれなりのしかるべき一つの配列基準があり、それによってなされたとみるべきである、これはおそらく近景から遠景へという主題の移向からではあるまいか。一九七・一九八・一九九の歌をあげてみると次の如くである。

197 雲の浪にとまるせなしと行月の舟なかつたるさよの春風

198 かさなれる山のはみせて夕暮のかすみの奥に月や出らん

199 吹かせも及はぬ山の夕霞月の光や先はらふらむ

となっており、いわば川に浮かぶ舟に擬した月の叙景から、遠く山の端にかかる月へと趣をうつしていったものであると考えられるのである。

4 次は二九一・二九二・二九三の三首の歌についての相異点であるが、松本本の属する第二類の諸本には相当の異同があることは既に述べた。松本本において二九一・二九二・二九三の歌が春部の末尾に記されていることは、三首の歌が当然ここにおかれるべきものとして考慮した結果とはみなすことができない。むしろ考慮されていないというべきで、いずれしかるべき位置におかれるものとして、ここに写しとめられているに過ぎないのである。それ故ここでは東大本についてのみ考察してみることにする。

東大本

223 いとゝなを老木のはなそをしほ山今も小松の色とみるにも

802 ふる雨に草のみとりの色そひて梅はきのふの庭の春風

803 はなさけは老木わか木の若緑分ぬを春の思出にして

291 そことしもしらぬ野山の桜より花こそ花のしほりなりけれ

292 尋ね入心のとはゝいかゝせんまたみぬ山の花も有やと

293 もろくちる老の涙にくらふれば猶のとかなる花の朝露

224 山桜さきちる程は来ぬ人の花にそたえぬあをつゝらおり

まず八〇二・八〇三の歌は、玄旨集系統各類の諸本と衆妙集系統第一類のみに記されているものであって、衆妙集系統第三、第四、第五類諸本では除かれている。これは至極当然で、八〇三の歌はともかくとしても、八〇二の歌は梅の花の歌であるから桜の花の歌の中に配列されることは適当でない。幽斎歌集（第三類）、詠百首和歌（第四類）および細川玄旨法印歌集（第五類）では、花にまつわる題詠歌の最初に並べられていたのが、東大本では二二三の歌の後で、花の題詠歌の次に配列されることになり、結局所を得なくて松本に至り、除かれたものと考えられるのである。

さてここで二九一・二九二・二九三の歌であるが、その題詞に

三月五日、也足軒興行餞別当座に、花を

としてある。幽斎御和歌集および玄旨様御哥によると、これら三首の歌は天正二十年の項に見出だされ、この年はちょうど四月に幽斎が秀吉に随って九州征伐に赴いているので、也足軒中院通勝が餞別の興行を催したことも背けるわけである。

これら三首の歌の配列位置については、第二類の諸本においても種々の試みがなされているが、第一類では一応題詠歌の後、詞書のある歌の初めに位置している。餞別の歌がこのような箇所にあるのは問題であるから、松本本の編集の際に一まず春部の最後においても考えられるのである。後考を俟たねばならぬであらう。

5 松本本において二三八の歌が二三九の歌の題の下に小書されていることは既述した。東大本では二四六の歌と二四七の歌の題の間に小書きされている。二三六より二五二までの歌は、題詞に

文禄三年二月廿九日、関白殿吉野の花御覧のとき、人々五首の哥つかうまつりけるに

おなし時に、人々にかはりてよめる哥の中に

とあるように

はなのねかひ

はなをちらさぬかせ

たきのうへの花

神のまへの花

はなのいはひ

と題して、幽斎がよんだものである。幽斎公御和歌集では文禄三年の項になくて、文禄二年の冬の題の次に掲げてあるが、玄冒様御哥では文禄三年の項に記されているし、二四一・二五〇・二五一の歌は、武州大納言殿作代、二四二・二四三・二四四・二四五・二四八の歌は和州中納言殿作代、二四六・二四七の歌は常真御作代、二四九の歌は筑州作代、二五二の歌は伊達越州作代としてある。東大本に二三八の歌を二四六の歌の次に小さく書き入れたのは、明らかに誤りであるといえよう。ただ東大本の書入れは雅章の書体に似ているが、松本の書入れは書体に相異があり、また松本の模写とみられる佐賀大本には、この書入れがない。このことから考えて松本本にもこの歌はもともと脱落していたのであろう。

6 以上までは春部についてであったが、夏部、秋部、冬部、恋部には歌の配列順序に相異はない。雑部上にいたって再び相異点を見出だすのである。

574	573	572	571	570	569	568	
披書知音	思往事	同	遊女	古寺鐘	同	田家	松本本
579	573	570	575	574	569	568	東大本
社頭祝	思往事	古寺鐘	同	披書知音	同	田家	

581	同	581	同
580	祝	580	祝
579	社頭祝	578	社頭祈君
578	社頭祈君	577	同
577	同	576	社頭柳
576	社頭柳	572	同
575	同	571	遊女

題の配列によってもわかるように、松本本では田家と古寺鐘、思往事と披書知音、そして社頭柳以下祝の歌がそろっており、より整然としているのである。松本本は東大本よりさらに工夫をこらしたものであるということができる。

以上で松本本と東大本とにおける六の相異点をあげて、それぞれについて比較検討したのであるが、これらに関する限りでは、松本本のほうが東大本よりも一段と整理されており、松本本は東大本のあとに編集され、書写されたものであると認められるのである。特に松本本になくて、東大本にある八〇二・八〇三・八〇四・八〇五・八一・八一三・八一四の歌は玄旨集系統の諸本にはあるが、衆妙集系統では松本本の属する第二類を初めとして、第三類、第四類の諸本にはいずれも省かれていることから、東大本は他の第一類諸本とともに衆妙集系統諸本中では、玄旨集系統により近く、第二類、第三類、第四類諸本とは明確な区別をなしているのである。ただ次に述べる相異点は、松本本が東大本の後に編集されたという考えをおしすすめる上に、多少の論議を必要とするであろう。

松本本において見せけちになっている一六四・三九二・四一八・五四二の四首の歌が、東大本では欠けている。(そのほか一八八の歌も脱落しているが、この歌については前に記した。また五一一の歌は松本本、東大本ともに重複しているが、松本本のはうは見せけちになっているが、東大本ではなっていない。四〇〇の歌と五四二の歌も重複歌であるが、松本本、東大本ともにそのままのせてある。) 常識的にいえば、見せけちになっている歌は再編集する際省くのが当然であろう。とすれば、東大本は松本本を再編集したもの

ということになる。もし松本本が東大本のあとに再選されたとなると、四首の歌を補って見せけちにしたといわなければならないことになり、検討を要するであろう。以下個々の歌について考察してみたい。

一六四の歌は三の歌と重複して記されている。前に記したように松本本およびその模写本のみは配列順序が例外的である。東大本に欠けているのを補おうとして、所を誤ったと考えてはどうであろうか。第二類の他の諸本では、書写の際にこれを訂正したわけである。三九二の歌は詠二十首和歌の中の一〇九と重複してのせられている歌である。玄旨集系統第四類の詠百首和歌にはあるが、第四類の諸本すべてにのせられているとは限らない。四一八の歌は詠百首和歌の中の五九の歌と同じである。玄旨集系統第四類に属する詠百首和歌、同第五類に属する細川玄旨法印歌集では東大本と同じく除かれている。しかし第三類の幽斎歌集にはのせられてあって、あるいは松本本の編集の際組入れられたともいえよう。五四二の歌は詠百首和歌の中の九二の歌と同様に詠百首和歌、細川玄旨法印歌集にはないが、幽斎歌集にはある歌である。

このようにして四首とも詠百首和歌または詠二十首和歌中の歌と重複しているのであるが、松本本にこれらをのせて、しかも見せけちにしていることは、松本本の編集の際、東大本のみを参照したのではなく、同時に玄旨集系統の諸本をも参照したのであろう。両者をあわせて配列順序をしかるべく考慮し、その上で東大本によって脱落しているものには見せけちを施し、重複歌であることを示したのではなからうか。推論があるいは松本本を東大本のあとに編集したものとして牽強附会であることをおそれるのであるが、ただこの点のみが問題となるだけで、他の相異点はすべて東大本の次に松本本が編集された証となりうると考えられるので、あえてこのような推論の可能性もあることを述べたわけである。

松本本と国会図書館本

国会図書館本衆妙集（九一一・一四九・H七二七S）については、既に発表した拙稿において比較的精細に述べておいた。錯簡の部分を正すならば、衆妙集系統第二類の諸本ときわめて近い配列順序をなしているのである。松本本との相異も、一六四の歌については松本本とその模写本とのみにみられる特殊な点から生じたものであって、第二類の他の諸本とは相異することがなく、また国会図書館

本における五〇三・五〇四の歌の脱落は、この本のみにあって他の諸本にないところから、松本本と国会図書館本とを、それぞれ第二類、第三類の代表として比較する場合には、むしろ省いて考えるべきであろう。また国会図書館本に二三八・五一一の歌が欠けていることは、第二類の諸本の中にもみられることであって、第二類と第三類との諸本の差を決定づけることではない。

したがって国会図書館本、慶応義塾大学図書館本、大東急記念文庫本の衆妙集をもって第三類に分類することは、若干のためらいがあったわけであるが、しいてこの分類をした理由は、主として二九一・二九二・二九三の歌の配列箇所によるわけである。これらの歌は第三類の諸本において二〇八の次、すなわち花の歌の最初におかれていて、配列の意図はより明瞭であり、第二類とはおのずとその区別が明らかであると考えられるのである。まずその位置を松本本によって示すと次の如くなる。今繁を避けて大凡の題のみをもつてしよう。

春部

立春・元日・初春 一二二―一五二

早春鶯 一五三

春風解氷 一五四

朝霞 一五五―一六三

鶯 一六四―一六六

若菜 一六七―一七一

残雪・霜 一七二―一七五

梅花 一七六―一九一

柳 一九二―一九三

春月 一九四―二〇〇

春曙 二〇一―二〇二

春流飲馬 二〇三

春雁離々 二〇四

岡春雉 二〇五

雲雀 二〇六―二〇八

花 二〇九―二八〇

雨後苗代 二八一

藤 二八二―二八五

郭公 二八六

暮春鶯 二八七―二八八

三月尽 二八九―二九〇

花 二九一―二九三

これによって明らかなように二九一・二九二・二九三の歌は、最後にあるべきではなく、いずれはどこかへ挿入されるべきものである。衆妙集系統第一類では二二四の歌の前におき、第四類では二八六の歌の次におかれてある。第二類の中でも、書陵部本では二一の歌の前に、永青文庫蔵本のうちの二本は第四類と同じく、二八七の歌の前においてあることは既述したとおりである。しかし第二類諸本は大体において未だ配列されていない状態のままに書写されているといえよう。

したがって国会図書館本において二九一・二九二・二九三の歌は、一応工夫の上配列されているものと考えられ、他の点では第二類諸本ときわめて似ているが、あえて第三類として分類したわけである。しかも弥富浜雄の識語によって細川行孝卿自筆本というなら

ば、由緒あるものとして、一分類項目をたてうる理由も可能とみたのである。

松本本とお茶の水図書館本

お茶の水図書館本は刊本を始めとする流布本の祖本と考えられるが、松本本と比べてみると八首少なく、刊本はさらに九首、あわせて一七首少なくなっている。これらの歌については、既論文において述べておいたが、歌番号のみを再記すると次のとおりである。

三四・一五二・一六四・二四二・二七一・三〇〇・三三三・三七四・三八四・三八五・三九二・三九八・四一八・四二一・四五六・五一・五四二（ゴチック体はお茶の水図書館本には残されている歌の番号である）

省かれている理由として、重複している歌であるとか（一六四・三九二・四一八・五一・五四二）、行間に書入れられた歌であるとか（三四）、配列箇所が当を得ていないとか（三八四・三八五）、肯けるものもあるが、説明のつけられないものもあって、さらに考えをすすめてみなければならない。

歌の配列順序の特徴、松本本との相異など、衆妙集系統第四類に分類した理由は既述したので、ここでは省略することにする。ただこれらの点を除けば、第一類諸本よりは第二類の諸本に近似しており、流布本が第二類より編集されたことを指摘しうるのである。

付記

最近管見に入った衆妙集系統の二本を次に記しておく。

衆妙集 玄旨家集 上（下）

家蔵

縦二四・一センチ、横一六・〇センチ、袋綴二冊本。墨付上五一丁、下三七丁。第一類に属する。

衆妙集 全

宮田正信氏蔵

縦二四・六センチ、横一七・八センチ、袋綴一冊本。墨付五七丁。題簽は改竄して全とあるが、上巻のみの零本。第四類に属する。